小さな目

原田武信

一

朝、美和子は一人でコーヒーを飲んだ。飲む時音さえたてた。しかも、全部飲まず、茂を幼稚園へせきたて、牛乳をこぼしたあやねをきつく叱った。その姿はいつもの美和子でない。

本心は、おれに当り散らしたいのだろう。そう思いながらも江本は黙っていた。昨夜の不快な気持ちが残っているからだ。

江本は「ＫＫボトリング北上営業所」に勤め、販売促進課に属している。

営業所は県内に五ケ所あり、昨日、各営業所の販売担当者が盛岡の本社に呼ばれ、販売対策会議がもたれた。会議は熱をおび、予定の五時をはるかに超え九時に及んだ。

熱気に煽られ江本は、時間の伸びたことを美和子に連絡していなかった。そのため、帰りは国道をやや焦り気味に走った。雨あがりで路面も見えにくく、焦りはますます高じた。

焦りが収まらないまま花巻空港前に来た。そこからゆるい坂道が続いている。

坂道の途中に左ウインカーの点滅している乗用車が見えた。駐車中だ、と気づいた時はすでに遅く、ガシャッと音がした。

髪を染め、ピアスをした若者が飛んできた。

「おたくだな、ぶっつけたのは」

喧嘩腰に彼は声を荒げた。

「おたくだってもっと左に寄るべきだよ」

江本も車の停めた位置をなじった。

「ぶつかったのはお宅じゃないですか」

目を三角にし、威圧するように彼は言う。

このままでは水掛け論になる。

「いや、まず、警察に連絡しよう」

若者は睨むように江本を見た。

警察が来て実況検分した。相手の破損個所はバンパー、テールランプ、それと右後のド

ア。江本の方はバンパーと左のライトだった。
終わって警察は、人身事故でないから事後処理は二人でするようにと帰っていった。
車は双方とも動く。それではと若者は、近くに知っている自動車整備工場があるからそこへ行こうと言ってきた。
相手の知り合いということで江本は警戒したが、やむを得ず同意した。
時間は遅かったが整備工場には整備士がいて、修理の見積りは明日連絡すると言った。
若者と別れ、江本は近くの花巻空港駅へ歩いた。時計はすでに十一時をまわっている。
「もしもし、美和子」
駅に着いて江本は携帯電話で美和子に、追突事故を起こし電車で帰るから、十二時頃着くだろうと早口で言った。
「はいっ。それで今、どこにいるの？」
「花巻空港駅だが」
「そう。でも、今日の記念日は……」
美和子は言葉を濁した。しかも、濁した声にどこか責めるようなニュアンスがあった。
昨日は美和子の誕生日だった。子どもの頃から彼女は両親に、誕生日は最も大事な日だと言われ、結婚してからもその姿勢は続けている。そのため、誕生日が江本の時でも茂やあやねの時でも家族が揃い、みんなでお祝いするのが何よりも優先することだと言っている。
それはそれでいい。だが江本は、妻として美和子が、自動車事故と聞いて怪我はないのか、今手元にいくらお金があるのか、あるいは、相手の人がどんな人なのかといった心配や気づかいの言葉を当然かけてくるものと思っていた。だが、彼女にそういった気配がない。そのことに江本は意外な気がした。美和子の口ぶりから推察されるのは、なんで大事な日に事故など起こすのだ、しかも連絡がこんなに遅れるなんて、といった非難めいたことを感じさせるものだった。彼女の几帳面な性格がそうさせるのかも知れないが、江本は彼女に割り切れない違和感をおぼえた。彼の心に、これは事故を通して、彼女の意識下にある生来の素地がひょっと意識上に浮かび上がってきたのではないかという考えが生じた。
電話の声に気が重く、帰ったあと江本は、電話以上のことを話す気になれなかった。

昨日の事故で江本は物置から自転車を出した。出勤に使うのは初めてである。
家を出ると電車の音が聞こえた。彼の住む野崎住宅街は北上と花巻の中間にあり、東北本線野崎駅の西側にあるからだ。
住宅前の道路を左に曲り、国道四号を横切って流通団地にある会社に着いた。久し振りの自転車に腿の張りを感じたが、体全体は軽い運動でむしろ喜んでいるみたいだ。
朝の打ち合せの後江本は、矢沢課長に会議の様子を報告した。矢沢は二年前、盛岡営業所に転勤した梨本課長に代わり、県南の一関から転勤してきたやり手の課長だ。

会議の報告をした後江本は、帰り際、花巻空港前で追突事故を起こしたことも話した。
「ほー。江本君ともあろうものが、何で追突などしたのかね」
言葉は柔らかいが、矢沢はきつい顔をした。
「雨で道路が見えにくかったこともありましたが、焦っていたのだと思います」
「焦った？　報告にあるような時間でか？」
「はい。子どもが具合が悪いと言うもんで」
江本は子どもにかこつけた。とても美和子の誕生日などとは言えないと思った。
「そうか。それで、相手の人に怪我などは？」
「それはないです。停車中だったので、それが幸いしたといいますか」
「そうか、それは良かったな。しかし、事実は事実だ。本社の方には報告しておくぞ。それにしても君、安全運転を心掛けなくちゃだめだよ。うちらは事務屋と違い販売なのだから、車がないと仕事にならないだろうよ」
はい、すみませんと江本は頭をさげた。
帰宅すると、整備工場から電話があったと美和子が言った。
「そうか。で、何か？」
「修理費の他は何も」
まだ、突き放したような言い方だ。今朝と変わりがない。
テーブルにつくと子どもたちがばかにおとなしい。きっと美和子が事故のことを話していたのだろう。茂は距離をおいて坐り、横目で見ている。あやねもパパと寄って来ない。
重い空気のなかで夕飯を食べた。
そのさなかに電話が鳴った。
「もしもし、江本ですが。あ、鳴海さんですか。昨日はどうも……」
修理の見積りができたという連絡だった。
「明日、鳴海さんと会ってくるからな」
見積りを彼と確認し、そのあと支払いをしようと江本は思った。
「それでお金はどれ位用意すればいいの？」
「えっ、お金？　いいよ。確認してからで」
「そうはいかないものよ。前金をいくらかでも払っておいた方が、効き目があるはずよ」
効き目と言われ、江本はその言い方に引っかかった。追突したのはこっちだが、男同士の話し合いだ。そんな駆け引なんてあるはずがない。いや、あるいは、相手次第で美和子の考えに一理があるかも知れない。だが、いくら相手が茶髪の若者でも、一定のルールがあるのだから、それ以上の不当な要求はしてこないはずだ。こっちも変に気をまわさないでルール通りに行動すればいい。何も前もって云々なんてする必要がない。そう思う彼は、どこか小賢しい美和子の考えに頷くことができなかった。

「美和子。何だよ、こんなに買って」
五ダースも届いたビールにびっくりした。
しかし、美和子はこの方がお徳だという。
車の修理代は保険をきかせたが、自損事故保険に入っていないため自損の方は自腹をきった。今さら悔やんでも仕方がない。
事故なんてよくあることだと江本は深く考えなかったが、美和子の方は自損の出費にショックを受けたようだ。子どもたちにさえ、今晩のおかずはこれくらいよとか、その靴はまだはけるでしょなどと言い聞かせている。家計に余裕のないことはわかるが、何もそこまで言う必要はないだろうとそうした美和子の態度に江本は嫌な気がした。だが、原因は自分だから彼女に、子どもらにはあまりきつく言わないでいい、おれも晩酌は止めると言った。そうですかと美和子は頷いたが、次の日ビールがごそっととどいたのだ。それはいかにもあてつけがましく、江本は一本のビールにも蓼(たで)のような苦さを感じた。虫なら蓼食う虫もいるだろうが、苦いものは苦い。
江本は自宅にハリネズミでも飼っているような気がし、話しかけようにも細いハリが飛んできそうで話しかけることがなくなった。

七月に入りドリンク販売には拍車がかかる。
美和子はこの時節、例年になく畑によく出た。ナスやトマト、ハクサイ、キャベツ、トウモロコシなどが勢いよく育っている。
畑に出ている美和子の意図は江本に読めた。美和子が江本を避け、畑を逃げ場にしているということだ。そんな美和子に江本は、こんなに片意地を張った融通のきかない性格だったかと、初めて会った時の彼女のもの柔らかな、包み込むような話ぶりをふと思った。
県北の二戸営業所からここに転勤して二年目。江本は課長の梨本に、おれの娘はどうかと長女の美和子を紹介された。娘は二人いるが、長女でも気に入れば嫁に出すという。奥さんも婿云々にこだわらないと言った。
盛岡にある梨本の家で江本は美和子に会った。姉妹二人のせいか彼女は控えめで、趣味はお茶やお花といった習いごとが主だが、岩山パークランドスキー場に近いためスキーを少しやると言った。
赤いバンダナで無造作にゆった髪型を見て江本は、彼女の飾らない、大らかな人柄を想像し、おれで良かったらぜひ、と梨本夫妻に付き合いをお願いした。彼女も承諾した。
江本は両親に美和子のことを話した。
江本の両親は南郊外の住宅街に住んでいる。
父は給食センターのボイラーマンで、母は八十坪ほどの畑を耕し、姉はすでに嫁いでいる。美和子との結婚を話すと両親は狭い家だからと別居を望み、野崎駅に近い高沢住宅街

に一戸建てを見つけてくれた。
高沢住宅はハーモニカ長家が五棟と一戸建てが十棟ある。一戸建てには三十坪ほどの畑がついていて、美和子は畑に興味をもち、隣の家から肥料や苗を分けて貰い、家事の合間に野菜を作った。
江本は畝作りや草取りを美和子に言われるが、あまり協力していない。小さい頃手伝わされ、それが嫌で逃げまわっていたためだ。当時、家のまわりにまだ空地がいっぱいあり、近所の子どもらと日暮れまで野球に熱中した。そうした環境がスポーツ好きな江本をつくり、今でも朝野球のサードを守っている。
そんなある日の日曜日。
美和子は朝から子ども達と草取りに出た。
江本は水曜日休日の変則勤務だが、その日は先週の代休で家にいた。だが、おれもやらねばとジャージーに着替え、畑に出た。
「江本さん、早いすね」
隣の藤田だ。
「藤田さんこそ……。いやあ、いつも堆肥や苗をゆずっていただいてすみません」
帽子を取り、江本はお礼を言った。
「いや、いや、なんもどうってことはないすよ。それにしても、江本さん。奥さんには負けやんした。トウモロコシだってナスだってうちらのよりずっと太いし、大きいし」
「だって、ほら。江本さんちは二人で一生懸命だもの。見ていて微笑ましいですよ」
奥さんも鍬を休めてほめそやした。
いや、いやと江本は苦笑した。
「それに、わらし達もちゃんと手伝って」
そんだねと同意して奥さんが言った。
「うちは、このだんなとけんかばっかりなんでね。あたしがここにキュウリを植えようとすると、だめだ、それだばナスが日陰になるとか、キャベツを植えるとそれでは間かくがせまいとか、とにかくうるさくってかなわないのす。だから、二人で離れて半分ずつ、自由に作ってるのす」
そういえば、藤田さん達は二人でいても違った作業をしている。六十は過ぎたと言っているから、その年齢だと自分流のやり方が確立してお互い干渉しないのだろう。
だが、明るく悪口を言い合う藤田さん達こそ開放的で、健康的な夫婦のように思われる。
事故が起きて十日ほどした朝、江本がコーヒーをいれようとすると美和子は、いらないと言った。八時の電車で実家へ行くという。
「しかし、茂の幼稚園はどうするんだよ」
だが、茂は着替えていない。

「あら、今日は職員の研修日でお休みよ。たしか、七月の行事予定表にあったはずだが」
美和子は立ち、壁に貼ってある幼稚園の行事予定表を確かめた。
何もそこまでしなくてもわかるのに。
「まあ、行くのはいいとして、昨日あたりでも話してくれれば駅まで送って行ったのに」
「いいのよ。あなたの忙しいのはよくわかってますから……。駅といったって二十分も歩けば行けますわ」
「でも、子どもらを歩かせては大変だろう」
「いいえ、大丈夫です。茂。歩けるよね」
「パパ。心配しないで」
「茂。おまえ、本当に、いいのか」
江本は子どもにある距離を感じた。
「あやねは、おんぶして行きますから」
美和子にきっちりそう言われ、江本は黙った。あの事故以来負い目があるせいか彼は、美和子の正確無比な立ち居振る舞いに押されっぱなしなのである。
その日夕方、弁当でも買ってくればよかったかなと江本は玄関を開けた。
茶の間に入ると、テーブルの上に白いクロスが掛けられ、メモが添えられてある。
メモは食事のメニューで夜はこれとこれ、朝はこれとこれなどと書かれている。
一家族のいない、静まり返った茶の間に貨物列車の音が飛び込んできた。その音に急かされるように江本はテーブルのクロスを取った。そこには豚肉のしょうが焼き、ほうれんそうのごまあえ、キャベツのロール巻き、じゃがいものお煮付け、ナスの漬け物、そしてトバのおつまみ。さらに、とうふとわかめの味噌汁やごはんが用意されている。
ありがたいと思いつつ、今はわざとらしく、テレビのニュースさえ苦々しく見た。
画面に主婦の殺人事件が流され、江本は晩酌の手が止まった。
事件は夫の浮気に怒り狂った主婦が手を下したというが、夫婦になった男女は結婚した後にぐらつく危うい関係にあるものだと江本は実感した。おれたちだって何も浮気をしたとか、ギャンブル狂いしたといった家庭破壊をおこした大ごとではないのに、ハリネズミのように針を立て、我が身を守っているように思われる人がいる。やはり、誕生日を祝えないことにこだわっているのだろうか、それとも他に何か。まさか、あのツーショットのことではないだろう。
それは、去年の忘年会のことだった。
北上営業所の七人は二泊三日で八幡平の温泉へ行った。男性が主なスタッフのなかに女性が二人いる。そのうちの一人が、江本が転勤してきた時入社した女性で、専門学校を終わった後さらに回り道をしたから二十、四、五歳らしい。歳ははっきりしないが髪を短く切り、二重瞼のきりっとした顔はボーイッシュで江本によく話し掛けてくる。新採用者と転勤者という職場でのスターター意識がそうさせているのだろう。少なくとも、江本には

そう思われた。
ただ、忘年会では彼女は酔っていた。
二次会のカラオケバーに行くと彼女はやたらと江本に寄ってきて、デュエットをリクエストした。気がつかないうちに写真にとられ、忘年会の記念写真に加えられていた。それを知らない江本は、美和子に忘年会の話をしたついでに何枚かの写真を見せた。そのなかのツーショットを見て美和子は顔色を変えた。その後、彼女から社用の電話があっても美和子はどこか不審な顔をするようになった。やましいところがないと思っている江本は美和子の顔色を気にせず、今まで来た。
夕食がおわりコーヒーを飲んでいると、美和子を初めて両親のところへ連れていった時のことがふっと思い出された。
「これ、善雄さんの畑なの」
思い掛けなく彼女は畑の野菜を見て喜んだ。
「そうだよ。おふくろが頑張ってるんだ。おやじはむしろ、手伝ってるってとこかな」
畑をさっと見て彼は素っ気無く言った。
「いいわね。あたしも野菜を作りたいわ」
それが夢だと彼女は両親のことを話した。
美和子の両親は、庭造りはやるが畑はやらないという。今の広い庭はかつておじいさんが耕していた畑だった。だが彼女の父は転勤族で、しかも母は土アレルギーなので畑をつぶして庭石を置き、池を作った。だが、おじいさん似なのか彼女は畑が大好きである。
江本にとってこんな畑より美和子の豪邸や庭が羨ましく、そんな家庭に生まれた彼女が、バラックみたいなこの家や暮しをどう思うか内心気が気でなかった。
美和子を通した床の間も銘木などとはほど遠く、父が能登の輪島に旅行した時買ってきた輪島塗の花瓶が、わずかに床の間らしい風情を保っているだけだ。
一通り挨拶したあと江本の母は、美和子の父のことを話題にした。
「美和子さんとこのお父さんは課長だそうだけど、部長になるのも時間の問題ですね」
すると美和子は意外なことを言った。
「家に帰ると父は仕事のことを一切口にしないんです。それに、あたしたちも聞かないし」
「そうだすか。うちの善雄も会社のことは何にも言わないたちで……。うちらはうんと聞きたいと思ってるに」
江本の母は日頃の思いをぶちまけた。
「母さん。何もここで愚痴を言わなくても」
江本は軽く母をにらんだ。
「いいのよ、善雄さん。それより、畑の野菜が生き生きしていて、江本さんのうちでは野菜作りがとってもお上手なんですね。びっくりしましたわ」
「アレッ。美和子さんは野菜のことがわかるのすか。いやー、まあ、野菜が好きだなんて、

うちらの方こそびっくりしやした」
「だって、五月の季節にエンドウが、あんなにきれいな赤紫の花を咲かせているんですもの。あたし、うらやましいと思いましたわ」
「あれはね、去年の秋に種をまいて一冬越させたものなんです。エンドウって、ほら、スガワリとか言うでしょ。スガって氷のことだから寒さにつよいんですよね。盛岡の方では言わないすか」
言いますよと美和子はコーヒーを飲んだ。
コーヒーは江本がいれたものである。学生時代、喫茶店に入りびたりだった江本は、家に帰るたびにコーヒーを土産にした。最初両親は口に合わないと言っていたが、ブルマンをブレンドした特製のものを飲ませたところ両親は、これは口に合うと言った。いつしかそれは「よしおブレンド」と呼ばれ、家族皆が食後に飲むようになっていた。
「わしも畑は家内にまかせっきりなもんで」
朴訥な江本の父も、コーヒーカップを口に運びながら女たちの話に加わった。
「いや、手伝わないのはおれだけさ。父さんはコツコツタイプだから、結構見えないところで畑にのめり込んでいるんですよ」
「おお、善雄も見る目ができてきたな」
息子を見直したと言わんばかりの父に同意し、美和子もニコッと江本を見た。

二日泊まり、美和子は帰って来た。
夕食時、あやねを抱いて江本は、盛岡の両親は元気かと美和子に聞いた。
「ええ、お陰様で元気です。でも、父には怒られました。夏場に入ってドリンク会社はかきいれどきなのに、なんでこの時期、のこのこ実家へ帰って来たのかって」
「……」
やはり課長の言いそうなことだ。
「だからあたしも、憎まれ口をきいてやったわ。孫を連れて娘が帰ったのに、そんなきついことを言わなくてもいいじゃないのって」
美和子の言草に江本は圧倒されそうになった。こんなことを口にする美和子だったろうか。よほど腹の虫が収まらなかったのだろう。しかし彼は、義父の言っていることがもっともだと思った。美和子は夏場の忙しさを知らないはずはない。父の仕事を見ているはずだ。とすると彼女は、おれと顔を合わせることに息苦しさを感じ、一時退避したのではないか。
それはおくびにも出さず子供たちに言った。
「ところで、茂。お前らはおじいちゃんとこでなにをご馳走になってきたんだ?」
茂は、すき焼きをお腹一杯食べてきたと満足したような顔で言った。
あやねも、うまかったと言った。

その時美和子は、とうとつに聞いてきた。
「あ、父に、自動車事故で家計も大変だろうなと言われましたけど」
「えっ、お義父さんはそんなことを」
どこで知ったのだろう。
「父から聞いたわ。相手の人は車さえ元通りになればいいって言ってたそうだが、まわりの人たちに入れ知恵させられたとか」
「何でそこまで知ってるの？」
「娘婿のことですもの。盛岡にいても会社の人事部からいろいろ聞いてるようよ」
「それで、お前はなんと言ったのだ？」
江本はそこのところが聞きたかった。
「修理代を払い終わったことは言ったけど、それ以外のことは、何も知らされていないからわかりませんと言いました」
「知らされていないって、それはお前に心配かけないためだよ」
「でも、あたしはあなたの妻よ。話したっていいじゃない？　それなのにひとことも」
美和子はハンカチを出した。
「なにも泣くことはないじゃないか」
「だって、あなたはいつもこうなんです。あなたの気持ちがあたしに伝わってこないのよ。毎日帰りは遅いし、お休みの日でもつき合いとかいっては仲間とどこかへでかけるし。畑の草だって伸び放題よ。それより、子どもたちとほとんど遊んでくれないでしょ。きっと、家庭なんかどうでもいいと思ってるのよ」
「何を言うのだ。たしかにおれは遅くなったり、家をあけたりしているよ。でもそれは、お前を信頼しているからなんだぞ」
なぜそれをわかってくれないのだ、と江本は言いたかった。以心伝心じゃないか。
「まあ、口って便利なものですね」
思わぬ言葉が美和子の口から飛び出した。
江本の顔色が変わった。
「なにっ。それを言うのだったら、もともとお前は、おれのところにくる気なんてなかったのじゃないか」
「それはあなたの方じゃないの。たしかに父は、北上時代、善雄はおれが見込んだいい男だ、あいつが来てから売り上げは伸びたし、職場も明るくなったと褒めていたわ。けど、あたしは父に言ったの。あたしにはあの人のことがなんにも見えないし、あの人のなかにあたしなんかこれっぽちもいないんだって。そしたら父に、お前は毎日なにを見ているんだとさんざん叱られました」
「……」
これはどう考えていいのだろう。

「母がうまくとりなしてくれたけど、あたしに見る目がないんだわ、きっと」
二人の言い合いに茂とあやねはじっと、二人の顔を見ている。黙ってしまった江本の膝をつっつき、茂が話しかけてきた。
「おじいちゃんね、いっぱいおさけのんでよっぱらっちゃったの。でも、ぼく、トランプをちょうせんしたんだ」
「そうか。それで茂はなにをやったのだ」
「ページワン、さ」
「ほう、茂はもうそんなのができるのか」
「できるよ。友だちから教わったんだもん。ねえ、パパ。やろうよ」
江本は二日見ない茂たちが変になつかしく、トランプの相手をした。
台所に走った美和子は肩を震わせながら必死に流しを洗っている。何かに気持ちをぶつけるように。

二

食後、コーヒーを飲む美和子は、ただ機械的にカップを口元に運んでいるだけだ。以前のように、これはおいしいとか、濃いとか、薄いとかの感想を言ってくることはない。江本も、どうだと聞くことはしない。聞きたいが、ひとことでも口を開けば彼女から鋭い返し矢が飛んできそうで口をつぐんだ。
江本は朝夕、習慣的に、行ってくるぞ、いま帰ったぞと自分の役割を演じているが、そこに家族の交流は見出すことができない。
家の中がぎくしゃくし、笑いが消えていくと美和子はより頻繁に畑に出るようになった。
江本が、そんなに身をいれてやらなくてもいいのにと言うと、あたしはこれが好きなんですと美和子は言う。彼女の身構えた姿勢に江本は、その原因を作ったのは自分だと思いつつ、男のプライドが邪魔し、それ以上突っ込んで話しかける気になれなかった。
そんなある日、江本が勤めから帰ってくると盛岡の義母が来ている。
「おばあちゃん。前もって言ってくれれば駅まで迎えに行ったのに」
ここに一人で来るのは初めてである。
「いいの、いいの。歩いたってすぐですから。ちょうどいい運動になりやんす」
そう言っておばあちゃんは茶碗を並べた。
「それはそうですが。でも、どうして急に」
「善雄さんもご存じでしょ、お父さんが三日間も鶯宿温泉で会議があるっていうのは。その間うちで退屈してるより、孫に会いに来た方がいいと思いやんして」
色白で、元気な義母は言訳がましく言った。
「そうですか。いや、助かります。夏場のノルマがあって、今、連日帰宅が遅いんですよ」

「あら、そうでやんすか。美和子は何も言わないけど。じゃ、おばあちゃんはいいタイミングで来たってわけね、ホホホホホ」
娘の家とはいえ、急に来ておじゃまかなと思っていたおばあちゃんは、江本にそう言われホッとしたように笑った。
おもちゃやチョコレートをたくさん貰った茂とあやねは、おばあちゃん、うんととまってねとおばあちゃんの袖を引っぱった。
「ねえ。まだ鍋の季節ではないけど、今日は涼しいからいいでしょ」
と美和子が、危ないからねと湯気のたつ土鍋をテーブルの上に置いた。
鍋にはハクサイや玉ネギ、ダイコン、ニンジンなどの他に笹かま、タラなどがこんぶのだしで煮炊きされ、卓上コンロの上でクックッと音をたてている。
味見をしながら美和子は、この野菜はみなうちで取れたものだよと明るく言った。
「茂ちゃんもあやねちゃんも、フーフーして食べなさいね。どれどれ、おばあちゃんが吹いてあげるから」
うん、と二人もほおをふくらませ、おばあちゃんのまねをした。
「子どもたちには冷たい牛乳がいいかな」
江本は冷蔵庫から牛乳パックを取り出し、ついでにビールも出した。
「お前もどうだ」
「いいえ。あたしは結構です」
仕方なく江本は、一人で飲んだ。
次の日、夕飯時、江本は聞いた。
「おばあちゃん。今日は草取りを手伝ったのですか。サツマイモやトウモロコシの畝間に全然草はないし、ジャガイモやハクサイ、キャベツの土寄せだって藤田さんよりていねいにやられてるし、びっくりしましたよ」
美和子はまだ台所にいる。
「あたしは別に、何も。まあ、せいぜい孫の相手をしたくらいで。美和子でやんす。美和子が、お昼を忘れるくらいやったんですよ。あたしもびっくりしやんした。小さい頃はみみずさえこわがっていたのに。あたしが感心したのは鍬の使い方。うまくなったねぇ。しかも、境目の荒れ地まで丁寧に刈ったんでやんすから」
「はあ？　あの荒れ地まで？」
「ええ、ええ。慣れってすごいもんですね。見てると、力を入れる時と抜く時がほどよくバランスがとれていて、あれにもびっくりしやんした。いつも善雄さんといっしょにやってるんでしょ？」
「まあ、そういったとこです。あ、いや、おれは、あまりやってないかな」
他意はないのだろうが、おばあちゃんの突っ込みに江本はグッとつまった。

四日泊まっておばあちゃんは帰って行った。
それから二日たった土曜日の朝。
江本が職場対抗の朝野球から帰ってくると、家の中が妙にしーんとしている。いつもなら子どもらが飛びついてくるのに。
「茂、あやね。どうしたぁ？」
上がり口から叫ぶと茂が出てきて、
「ママが起きられないんだって」
と泣きそうな顔で言った。
「どうして？　ママがどうかしたの？」
ユニホームのまま江本は寝室に入り、
「どうした？　具合でも悪いのか」
と軽い気持ちで美和子に声をかけた。
「今朝、起きようとしたら、腰が刃物で刺されたように痛くて……」
えっ、と江本はしゃがんで美和子の顔をみた。額に脂汗をにじませ痛みをこらえている。
「なんでこんな急に？」
と聞く江本に美和子は、とにかく同じ姿勢でいると、床についている部分がキリキリ痛み、横になろうとすると骨が筋肉に突き刺さるようでとても動けないと言った。
昨夜、寝る時は何ともなかったはずだ。すると、夜中の二時か三時あたりだったのだろうか。呼ばれたような気もする。だが江本は、五時の朝野球に遅れてはだめだと無理に眠り、目覚まし時計で四時半に起きた。特に変わった様子も見られず、すぐ川原のグランドへ車を飛ばした。ぜんぜん気がつかなかったのは、あるいは、美和子が江本を野球にだそうと我慢していたのだろうか。
「腰の下に手を入れて、少し持ち上げて」
とても同じ姿勢ではいられないから、向きを変えたいのだという。
江本は両手を腰の下にいれ、持ち上げた。
そのとたん、
「あーっ、痛い！」
と美和子は鋭く叫んだ。
あわてて江本は手を引いた。
「あなた、腰はだめだ。手を引っ張って」
とにかく、姿勢を変えたいと美和子は手を伸べた。しかし、ここずっと吹いている冷たい風が江本を微妙にためらわせた。
「外から帰って来て、おれの手は汚いぞ」
ためらう気持ちをごまかすためそう言訳した。
「そんなことはいいから、早く」

恐いものでもつかむように江本は美和子の指先を軽くつかみ、上半身を起こさせた。
すると美和子は、トイレに行きたいから手を引っ張って立たせてと言った。言われて江本は手を引っ張った。だが、気の乗らない握り方をしたため、江本の手から美和子の手がスルッとほどけ、ドシンと床に背中をついた。
「アッ、いたい！」
しまった。半端につかんでいた手は、美和子の体重でほどけてしまったのだ。
もう一度握ろうとした江本の耳に、恩着せがましく振舞うのは、今だぞと囁く者がいる。
そんなことはないと囁きを振り払い、江本はガッチリ手を握り、立たせた。
美和子は全身をまかせてくる。彼女が寄りかかると江本は倒れそうになる。
足運びは一寸きざみだが、なんとかトイレまで連れて行った。戻ってまた横になる時痛みが走り、美和子は悲鳴をあげた。
腰をなでて落着かせ、江本は朝ごはんの仕度をした。とはいっても、たまご納豆とおひたしとみそ汁だけである。
これだけでごめんね、と子ども達に謝った。
「いいよ。だって、できないんだもんね」
「あやねも、いいよ」
正直な彼らの返事に江本は、おれは当てにされていないのだと複雑な思いがした。
お昼におかゆを食べたが美和子は、一日中床に伏していた。日中はウトウトするが、夕方から夜にかけてまた痛み、水が飲みたいとか、寝返りをうちたいとか、トイレに行きたいなどと弱々しく言った。
「明日は病院に行こう。これは寝ていれば治る筋合いのものじゃないぞ」
江本も事態の深刻さに病院行きをすすめた。
「明日は日曜でも、あなたは出勤でしょ。寝ていれば治りますよ」
美和子はあくまでも気丈夫に言った。
「いや、おまえが動けない状態でうちにいる方がもっと心配だよ。茂とあやねが気になるなら、おふくろに預けてもいいのだぞ」
「いいえ。おばあちゃんには言わないでください。言えばきっと、あれくらいの畑で腰を痛めるようじゃ、何にも出来ない嫁だなんて笑われるにきまってますから」
笑われる、とはどういう意味だ。美和子はそれほど嫁・姑の面子にこだわっているのだろうか。困った時には近くのおふくろに助けを求めればそれでいいのに。
なんとか病院行きは説得して次の日、近くの当番医へ連れて行った。
「腰痛はどうってことがないが、奥さん、心に溜めているものがあるんじゃないですか」
白髪の医者はさりげなく美和子に聞いた。
「いいえ、特にはなにも……」
心当たりがないと美和子は言った。

「そうですか。それじゃ、注射をうって湿布しますのでひと晩、様子をみてください。あ、やはりコルセットをした方がいいかな。ま、腰痛というのは大体急激に体を使った時起きるもので、一応、畑の方は見まわる程度にして気長に治療にあたってください」
医者は変わったことを言ってるわけではない。しかし、医者の説明に江本の心がチクリと痛んだ。腰痛の原因は畑でないと思う。きっと、この家庭に吹いているすきま風のせいだ。その冷たさのせいだ。今、ふさがないと大変だぞ。そう思いつつ江本は、仕事にかまけてズルズルと日を過ごしていった。

三

八月に入った。
お盆を控え、販売課は「夏季特別キャンペーン」を企画し、目標数値のクリアを目指している。そのため、日中は目一杯外をまわり、売上げ計算は帰宅後にやらざるを得ない。
その日夜八時、江本は仕事部屋でパソコンに向かっていた。
「パパ。はさみかして」
茂が部屋を覗いて言った。
「今、手が離せないからママに言って」
茂は寝室へ行き、蒲団を敷いている美和子にはさみをかしてと言った。
「今、忙しいからパパに話して」
茂はまた江本の部屋に戻ってきた。
何に使うのかと聞くと、ビニールテープを切るのだという。茶の間をみると、ヤクルトの容器を縦に二個並べ、それをビニールテープで貼りつけ、ロケットを作るようだ。幼稚園で作ったことがあるらしく、手伝ってとは言ってこない。
何の気なしに江本は、手近にあった小さい和ばさみを渡した。それは刃先が少し開いていて、使う時親指と人差し指に力をいれ、二本の指をバランスよくせばめないと両刃がうまくかみ合わないものだ。使いなれている江本は、茂もそれなりに指先の力を調整しながら使うものだと深く考えず、パソコンの画面に目をうつした。
使ってすぐ茂は、切れないなあと使いづらいことをつぶやいた。
それでも何とか使っていたようだが、
「いたぃっ！」
と鋭く叫んだ。
美和子が飛んで来た。
「どこ、どこが痛いの？」
茂は、まゆ毛のあたりだとあいまいに言った。さらに美和子が聞くと茂は、刃先のバランスをくずしてはさみの先が顔に向かい、目のあたりを突いたようだと言った。しかし、

出血はなく、美和子は胸をなでおろした。そばにいた江本もホッとした。
工作を止めさせ様子を見た。だが、目は何ともなく、いつものようにその夜は寝た。
しかし、次の朝、美和子は不審に思った。
「茂。おめめにくろいものが」
よく見ると、黒目のそばにごま粒のような黒い斑点がついている。だが、茂はなんでもないと別に痛がる素振りを見せなかった。
しかし、母親の勘なのか美和子はあやねをおんぶし、茂を連れ近くの医院へ走った。
江本はいつもの通り出勤した。
会社に着くと美和子から、大至急、県立病院に来て欲しいと電話があった。
課長に話し江本は、病院の駐車場に車をおくのももどかしく、検査室に走った 。
茂は検査中で、血の気をなくした美和子がベッドわきの椅子に坐っている。
「どうだ。茂の様子は」
検査中だが気になり江本は小声で聞いた。
江本を廊下に連れ出し彼女は手短に話した。
野崎地区の医者は一目見て、これは自分の手に負えない、すぐ、県立病院の眼科医に診てもらった方がいいと言った。県立病院に急ぎ、救急患者の扱いで見てもらうと目の斑点はただならぬもので、即刻、手術しなければならない、午後行うので親が立ち合うように言われたのだという。
「いやー、不幸中の幸いといいますか、傷は眼球からわずかにそれていました」
検査結果を見ながら眼科医は江本と美和子に、もし、はさみの刃先がもう少し右に寄り、眼球の真中だったら完全に失明していた、傷があるのに出血していないのは刃先が細かったため外に血は流れず部分的な内出血にとどまり、そのため血豆になり黒い斑点状に固まっているのだと説明した。
「ただし、この血豆を手術した時、ほかの血管に傷がつけば失明ということもあり得るのでこれはとても危険で、微妙な手術なのだ」
と手術の途中で、予測できないことも起こり得る可能性があることを加えた。
身を小さくし医者の説明を聞いていた江本は、一番大事な眼球から刃先がそれていると聞き、ひとまずホッとした。
しかし、医者は、
「いいですか、親ごさん。親は絶対、子どもから目を離してはだめすよ。子どもは何をしでかすか予測できないのだから」
ときびしく江本と美和子を叱った。
「さて、今からすぐ眼筋にたまった血豆を取りのぞく手術をします。それで、手術が終わったら切り口の傷がくっつくまで、絶対、安静にしてください」
静かななかに命令口調でそう言うや医者は足早に検査室を出ていった。

医者と入れ違いに大柄な看護婦が、キャスター付きの移動手術台を押して検査室に入って来た。彼女は手術台に茂を乗せ部屋を出た。
手術室は一階にある。江本とあやねを抱いた美和子は階下におり、手術室前の椅子に坐った。坐ると江本は美和子に何か声をかけたい気が起きた。茂は大丈夫だろうか、手術はうまくいくだろうか、と。だが、これから行う手術の結果が恐ろしく言葉が出てこない。言おうと思ってもすぐ飲み込んでしまった。
黙ったまま、ただ手術の成功を祈る他ない。
茂が手術室に入ったあと手術中の赤いランプはつきっ放しだ。その間、厚い扉の手術室からはコトリとも物音が聞こえてこない。
扉の向こうで茂が手術に耐えているのだと思うと、江本の心臓は早鐘のように鳴った。はたして手術は順調にいってるのだろうか。きっとうまくいってるにちがいない。江本は無理にでもそう思った。
うす暗い廊下に目が慣れてくると、手術を表す赤い電球が、一つ目の鬼のように鋭く赤い光を放っているような気がした。江本は魅入られたように電球を見た。目をそらすと耳の奥に、そらせば手術が失敗するぞ、茂は痛みに堪えているのだぞと何物かが囁いているようで目をそらすことができない。
美和子はあやねをきつく抱き、膝を小刻みに震わせている。赤い電球の光をうけ、彼女の顔は朱色に染まっている。目を閉じているのは手術の成功を祈っているのだろう。
赤い電球が消えたのは四時半だった。
手術室の扉があいた。茂の両眼には真っ白な包帯が巻かれ、顔が見えないほどだ。体には薄手のタオルケットがかけられ、ぐったりとしている。力のないその小さな姿は、まるで死んでいるようだ。
手術台の後について江本と美和子は病室まで歩いた。廊下ですれ違う人たちの突き刺すような眼差し。江本は針のむしろを歩いているような気がした。
茂の病室は三階である。そこから奥羽の山々が手に取るように見える。もし失明でもしたら茂は、あのきれいな青い稜線を片目でしか見ることができないのだ。いや、そんなことはない。江本は、考えたくない最悪の事態を無理矢理打ち消した。
一日、二日と茂は、はた目にもいじらしい程医者の言うことを守り、暑いこの季節にあってもほとんど動かず、じっと耐えていた。
美和子は病室に泊まった。江本は勤務を軽くしてもらい、日中はできるだけ美和子を仮眠室に休ませた。夜はあやねを連れ、両親の家で寝た。
あやねとは夕飯まで近くの公園で遊んだり、池を見たり、絵本を読んでやったりしたがあやねは夜中に、ママはどこと泣いた。
江本はあやねの頭をなでながら、
「お兄ちゃんがおめめをいたくしてママといっしょなんだよ。だから、あやねは泣かない

でパパとおねんねしようね」
とあやしたが彼は、あやねより自分自身が泣きたいくらいに心が痛んだ。
お見舞いにきた盛岡の親たちや妹、あるいは親戚、知人には本当のことが言えず江本は、悪性のものもらいだとごまかした。
五日目の回診時、医者は治り具合を確認すると言った。
看護婦はていねいに包帯をほどいた。
だが、茂は目をつぶっている。左の目は使ってもいいと言われ、まぶたを開けた。しかし、半分しか見えない不自然さを感じたのか、
「ぼく、右の目も見えるようになるかな」
とぽつりと言った。
その寂しげな、訴えるような言い方に江本は、見えるようになって欲しいと心の中で懸命に祈った。美和子もじっと見ている。
右目のまぶたを開き医者は、
「ぼくちゃん。大丈夫だよ。きっとよくなるからね。心配しなくていいよ」
と茂を元気づけた。
それを聞いて茂は明るい顔になった。が、むしろ、医者の言葉に何倍も元気づけられたのは江本だった。ずっと、もしだめだったらどうしようと心が揺れに揺れていたからだ。
絶対安静の状態は依然として続いた。
だが、目は見えなくても耳と口はなんともない茂は時々幼稚園の話をしたり、あやねがぐずったりすると、どうしたのと話しかけてきた。その様子は退屈な気持ちを紛らわせているというより、見えない分だけ神経が敏感になり、何か話し掛けでもして不安な気持ちを振り払っているように思われた。
二週間後。
茂は順調に回復し、包帯をとる日がきた。
看護婦はゆっくり包帯をほどいていく。
恐いのか茂は、包帯のない左の目もつぶり体を硬くしている。見える、見えないという茂の不安な気持ちが江本にも伝わってくる。
医者は茂に、
「ぼくちゃん。しずかに目をあけていいよ」
と目を開けても心配がないことを言い、両手でまぶたを開き、じっくり目をみた。
入念に確かめた医者は、
「よくがんばった。おめめはなおったよ」
と太鼓判をおした。そして、江本と美和子の方を向き、我慢強い子だ、動かないでじっとしていたからこれほど治りが早かったのだと褒めた。
失明しないうえに茂の資質まで褒められ、江本も美和子も医者に心からお礼を述べた。

こうして入院に明け暮れ季節の移り変わりに目がいっていなかったが、退院すると秋の気配が濃厚にただよい、虫の鳴く音も頻繁になっていた。

茂が退院し、以前の生活に戻ったとはいえ江本は美和子に何かあることを感じた。江本が茂とキャッチボールしたり、すもうとったりしているとどことなく美和子の目が背後にある。気をつけてとか、危ないからねなどと特に言うわけではない。だが、遊び終わると茂に、手を洗ってとか、面白かったのと聞くふりをして美和子は茂の全身を観察する態度が出て来たのだ。しかし、江本は気がつかない振りをした。

茂の誕生日の日である。

茂はうれしそうに誕生パーテーの手伝いをした。ケーキのお皿を運んでいる。

市営住宅は台所から茶の間に入るところに少し段差がある。

その段差で、ガチャーンとお皿の割れる音がした。茂が段差につまずき、転んだのだ。砕けた破片が散らばっている。

「どうした、茂。そんなところで転ぶなんて、おまえってやつはなんて不器用なんだ」

思わず江本は軽くからかうように言った。

「あらっ。不器用っていうのは言い過ぎじゃないの。そうなったのも、手術してからよ」

走って来た美和子が鋭く言い返してきた。

「……」

江本は、とまどった。

「目の手術のせいよ。茂はずっと幼稚園ですばしっこく動いていたわ」

「何だ、急に。それはわかってるけど、こんな段差につまずくなんて」

「だから、あなた、気がつかないの。それは右目のせいでしょ。遠近の距離感が」

「何だよ。おれのせいかよ」

「そうでしょ。あたし、もう我慢できないわ。入院中、この子はどんなに苦しんでたか、あなたは何もわかってないのよ」

「お前以上にわかってるつもりだが」

「いいえ、何もわかってないわ。何であの時ビニールテープを切ってやらなかったのよ。何でそばについていなかったのよ。もしこの子が失明でもしたらあたしはこの子に何て言えばいいの。死ぬ思いだったわ。それなのに不器用だなんて、よくも言えたものね」

「おれだって、怪我をさせようと思ってやったことではないぞ。忙しかったからひょっとそばにあったはさみを」

「それがあなたのやり方よ。いつでもいい加減に物事をすませる人なんだから」

「何もかもおれのせいにするのかよ。茂はお前に最初、貸してと言ったんだろう」

「何よ、その言い方は。あなたがはさみを渡したんでしょ。あなたって人は、ことが起きてからあわててあれこれ言う人ね」

「お前に、そこまで言われたくないぞ」
江本は強く言い返した。
だが、そんな強がりを言ってみても現に、茂の行動を見せつけられ江本は、また後悔の念が怒濤のように押し寄せてきた。しかし、美和子には意地をはりたくなる。
ふと見ると、茂がお皿のかけらを拾っている。あやねも拾っている。
なんてやつなんだ、おまえらは。
「茂。ごめん。あやねも危ないから」
いいよと茂は、ほうきさえもってきた。
「どうだ、いるかなぁ」
玄関で声がした。
「あらー。おじいちゃんとおばあちゃん」
美和子の声に茂とあやねは飛んで行った。
「今頃、誕生パーテーをやってると思って」
江本の父が大きなケーキを差し出した。
「いやー、うちではショートだったんで」
江本は早速コーヒーをいれた。
「ねえ、パパ。ママといっしょに食べようよ。けんかなんかしないで」
「おい、おい、茂。お前は」
江本は美和子を見て赤くなった。
「なんだか、知らねども、子どもって親を見るカンは鋭いものだぞ」
そう言って江本の父はコーヒーを飲んだ。